

ぐるっと首都圏

# あきらめない力を培う



## 神奈川県立小田原高校 ⑤

麒麟ホールディングス社長 磯崎功典さん 1971年度卒



国内ビール類市場が縮小する中、グローバルな「麒麟ブランド」の再構築を任されている麒麟ホールディングス社長の磯崎功典さん(63)は1971年度卒。難しい判断も迫られる企業経営で必要な体力と精神力は、神奈川県立小田原高校時代に培われたという。当時の記憶をたどってもらった。【宇多川はるか】

昨秋、小田原高校から講演を頼まれ、学生を対象に話をしてみました。「挫折は自分を成長させる肥やしです」とか、麒麟入社後に米国留学した経験から「社会と付き合っている限り一生勉強だよ」とか。そんなふうに学生相手に話をしていると、まるで自分は学生時代からスリットストリートに歩んできたようですが、そうではないんです。高校生活は決してハッピーではなく、悶々としたものでした。

丈夫だった父が中学3年の時、脳梗塞で倒れました。家計が傾き、母は夜、洋裁を教え始めた。無理をして疲れもあったのでしよう。母が軽い交通事故を起してしまいました。大した事故で

いそざき・よしのり 1953年、神奈川県小田原市生まれ。77年慶応大経済学部卒業後、麒麟ビールに入社し、神戸支店に勤務。88年米国留学、98年麒麟ホテル開発、2004年サンミゲル出向、07年麒麟ホールディングス経営企画部長、10年同社常務などを経て、12年麒麟ビール社長、15年麒麟ホールディングス社長。

はなかったけれど、「(母が)ここまでしなければならぬのか」と思いました。母がかわいそうだったし、弟の大学進学も実現させてあげたかった。高校2年の夏ごろ、楽しかった吹奏楽部を辞め、自宅で兼業していたミカン農園の手伝いを始めました。田舎だし、便利でない時

## 教師、OBらが守った森



### 「樹叢」、県の天然記念物に

八幡山と呼ばれる小高い丘の上にある小田高。校庭南側の斜面にある「樹叢」(約1万平方メートル)は、高木層にはタブノキ、クスノキ、シラカシ、ヤマモモ、ヤブツバキなど日本の代表的な照葉樹が分布。林床にはアオキ、ヤツデ、シユロなどが混じる。

「小田高の樹叢」は、土地が県有地で、一帯が国指定史跡となる小田原城八幡山古郭の一部だったこともあり、大正時代に同校が現在地に移転してきた後も、ほとんど人手が加えられず残されてきた。しかし戦後、一帯も都市開発で急速に自然破壊が進んだ。昭和初期から約30年にわたり同校で生物教師として教壇に立った松浦茂寿氏が、これを憂えて「植物地理学上よりみたる小田原高校の自然林」を発表。さらに茂寿氏の息子で小田高を卒業(46年度)し、母校教諭などを務めた松浦正郎氏などがわずかに残った南斜面の樹叢を守るため、現地調査を実施して天然記念物の指定にこぎつけた。

「小田高の樹叢」は、土地が県有地で、一帯が国指定史跡となる小田原城八幡山古郭の一部だったこともあり、大正時代に同校が現在地に移転してきた後も、ほとんど人手が加えられず残されてきた。しかし戦後、一帯も都市開発で急速に自然破壊が進んだ。昭和初期から約30年にわたり同校で生物教師として教壇に立った松浦茂寿氏が、これを憂えて「植物地理学上よりみたる小田原高校の自然林」を発表。さらに茂寿氏の息子で小田高を卒業(46年度)し、母校教諭などを務めた松浦正郎氏などがわずかに残った南斜面の樹叢を守るため、現地調査を実施して天然記念物の指定にこぎつけた。

代。20歳のコンテナを担いで段々畑を行ったり来たりしました。山のふもとの農協までミカンを下ろす時は車が必要なのですが、運転できない。そういう時は他の農家に肉體奉仕に行きました。手伝うと、その代わりに車を出してもらえた。試験中もそうやって農園を手伝っていました。精神力と体力は、あそこで付きましたね。

高校卒業後は就職しよう、勉強なんてしても大学に行けなければ仕方ない。そう思っていたのですが、高校3年の秋ごろ、父が奇跡的に回復しました。後遺症は残りましたが、職場に復帰できました。私は働かず必死に勉強することに、行くことができました。暗い高校生活でしたが、持ち前の明るさはあったと思います。私はネバーギブアップの精神で、当時も「なにくそ」という気持ちでどこかで持っていた。それは、今の企業経営にも通じます。短期でできないことはある。株主、アナリスト、メディアなどから早急な結果を求められますが、時間がかかってもあります。周囲に振り回されず、ビジョンを達成したい。

昨春、小田原高校で経営者が会するパネルディスカッションに参加し、何十年ぶりに当時の吹奏楽部のメンバーと再会しました。退部した時、見えもあって、家庭の事情を部の仲間と話

#### 卒業生「私の思い出」募集

神奈川県立小田原高(旧制含む)卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100-8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係(住所不要)へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、毎日新聞やニュースサイトで紹介することがあります。新聞掲載の場合は記念品を差し上げます。

せなかった。理由も話さずに退部したことで「みんなに迷惑かけたな」という思いもあり、卒業後も何となく疎遠になっていたのですが、会ってみたらみんな好意的に温かく迎え入れてくれた。年がいてもなくジーンとして、涙がにじんできました。